

虫の会発足にあたって 最近思うこと

木下賢司

この度但馬にも虫の会が発足することになり、日ごろから虫を、とりわけ蝶を愛好してきた私にとっては大変に嬉しいことだと思えます。これまでまったくの素人である私などには、難しい本など理解できるわけもなく、かといって指導を受けたり、話を交したりする相手なく、結局は空しく採集を繰り返すしかなかったのも、まさに待ちに待っていたという感じで、とても嬉しい出来事です。

でも、私を振り返ってみるとき、三十代も半ばに達し今年には小学校に入学しようかという子供を待ちながら、何故今さらにも虫だ蝶だと目の色を変えて騒ぎだて、またそのことについて少しも疑ってみなかったのかと、正直に言って不思議な気がします。

そんな私のことを世間一般流に言って、いい年をしてで片付けてしまうことは簡単なことでしょう。けれど、一度でも山野に出かけ、虫達を相手に思いきり白いネットを振り回してみたことのある人ならば、少しは私の気持ちも分かってもらえるかも知れません（もともと、今の大人の中でそんな経験の一度もない人なんているはずはありませんが……）。やうと桜の花がほころびはじめた春の日、まだ枯れ草の目立つ山路に、思いもかけずあの艶やかなギフチョウに巡り合った時の喜び……あるいは、ううとらしい梅雨も晴れた清々しい夏の朝、かたずきのんで見上げる梢に、キラキラとその緑色や金色の羽根を朝の日に輝かせて乱舞するゼフィルス達……そんなことを想像するだけで私の胸は高鳴るのです。そんな蝶達のことを、どうして少々年をとったというだけの理由で簡単に忘れてしまうことができるのでしょうか。

その蝶達と私が付き合いを持つようになってから早く

も二十年近くにもなります。もともと山好きなせいも手伝って、蝶達を過ってずいぶんあちこちと歩き回ったものでした。少しオーバーに言えば、嬉しいにつけ悲しいにつけ、私の青春時代の悪い出の大部分が蝶に運なっているように思うほどです。しかし、その大好きな蝶達のことで大変に氣になることがあります。

それは、以前から思っていたのですが、最近特に蝶の数が減少してきたということですね。スミレや桜の花に戯水、ゆく春を謳歌していたあの美しい妙聖寺のたくさんのギフチョウ達は、いったい何処へ行っちゃったのでしょうか。巨大な紫の羽根を夏の太陽にひるがえし、梢を高く低く飛び回っていた金山〔こんざん〕のオオムラサキはただの夏の夢だったのでしょうか。虫の減少、特に蝶の減少は、どうひいき目にみても悲しい事実です。蝶の採集を長い間続けてきた私がこんなことを書くのは、少し氣がひけますが、その決定的な原因を究明して、できれば保護のことを考えてやりたいものだと思います。

しかし、こう書いたすぐ後で次のように書くと、自然保護が盛んに叫ばれている現在、その立場に逆行するものだと言われるかも知れませんが（また、まったくの人間中心に考えたものの言い方だと言われるかも知れませんが）、本来私達が虫を愛しむということの中には、目でその姿や色を愛しんだり、耳でその鳴く音を愛しんだり、また蜜蜂かりは蜂蜜の味を、カイコから絹の膚ごわりを愛しむという他に、その虫自体を採集し、標本にして愛しむというような方法もあったと思います。まして、子供達にとっては虫を過っかけ回したり、採って糸につけて飛ばしたり、虫同士けんかをさせて愛しんだりという遊びはあったはずですね。現に、今の子供達のように立派な遊び道具を与えられることのない私達の子供のころには、夏の遊びの大半がセミヤトンボ採りで、採ったヤンマの数を競い合ったり、朝早く起きて採って来たカブトムシやクワガタムシをけんかさせて遊ぶなどまったく自然が遊び相手で、それはそれなりに大変に楽しかったらしく、今でも楽しい思い出として心に蘇ってきます。だから、その当時の夏休みの宿題に昆虫採集の

標本が幅をきかせていて、もともと虫好きの私などは、夏休みの終わりにば得意になってその標本を先生に見せたものでした。もちろん、その頃にはそんな行爲をどやかく言う人はありませんでした。

では、現在はどうでしょうか。勉強の方が大変に忙しくなっただけでもないでしょうか、山でセミやトンボを追っかけている子供などあまり見かけなくなりました。自然保護の思想が普及したせいでしょうか。私は決してそうではないと思います。それこそそのはず、本当に虫の数が少なくなってしまった現在、今の子供達がどんなに山の中を駆け回って見たところで、カブトムシの一隻も手に入れることは大変なことでしょう。それよりも手っ取り早く、デパートや夜店で買うことを考えた方がどれだけ楽で早いか知れませんが、それどころか、もともとカブトムシやクワガタムシはデパートなどで買うものであって、山の中に住んでいるものなどとは本質で違っていません。子供達ってあるかも知れませんが、そんな状態でいいのか、自然保護の思想も争って夏休みの宿題から昆虫採集の標本も姿を消していきましました。私なども徳州あたりでうっかりネットを持って探そうものなり、それはもう罪人を見るような冷たい目つきでにらまれてしまう時代になっただけでもないました。もちろん、私などが行なってきた採集は、こんなには蝶の減少してしまっただけで、并解の余地のなくなっただけで、たのしみも楽しみのようです。

しかし、そのことを十分承知の私が敢えて悪いというのは、では本当に虫を採らないということが、即自然を守り、保護をしていくという気持ちに違なっていくものなのかということですが、それに本当に虫を採るというような行爲はただ野蛮なだけの行爲であって、子供の成長には何の関係もない無益なことなのではないでしょうか。私は決してそうだとは思いません。

子供達はもともと虫が大好きですから、それでモデパートや夜店から二匹、三匹とお金を出してカブトムシやクワガタムシを買います。自然保護の為に虫を採ってはいけないと言った大人から、カブトムシやクワガタムシを一方では商品として買っていくのです。私にはそ

のことがとてもちぐはぐで、悲しいことに思えてなりません。少し考え過ぎかも知れませんが、現実には虫を商品として扱っている以上、虫を生きものとしてではなく、ただのおもちゃとしてしか見ることでしかないような子供達に育てられれば、極端な言い方をすれば、価値を失うのであらう。この世の中はすべて金でかたづけるといふやうな人間と、案外こんなところから育てられしはれないかと思ひます。そんな人間にとりては、本来の自然保護の精神が理解できるはずありませんし、もう虫も蝶も、自然のことなどどうなつても關係のないことになつてしまふのではなからうか。

自然保護協会の但馬支部に籍を置く私がこんなことを言へば叱られるかも知れませんが、子供は元來虫好きで虫を採らうが、時にはその爲に虫を殺す結果にならうが、それはやむを得ないことだと思ひます。親しく手に触れ虫を眺めてみるのがあつてこそ、興味がわき、愛情もわき、後々には自然保護の大切さも理解できるようになつてくるのです。第一に、トンボやセミの一匹も採つたことのないやうな子供なんてとても異常だと思ひ、そんな子供がそのまま大人になるのかと思ひ、とても無氣味な気持ちさえてきます。

とはいふものの、今の私には、ここまで自然破壊が進み、虫の数が減少してしまつた現在、子供が採る数ぐらいたいたことではないから、どんどん採集して下さいなと子供にいう勇氣はともありません。それを勧めることができないからには、虫への興味はそれを採集することのみにあるわけではなく、それを深く観察し、その未知の生活を知つていくことの方がどれだけ楽しい事であるかをよく教えてやつて、虫に（自然に）いかに興味を向けさせていくのが大切だと思ひます。それをしてないと、たとえ虫の採集を禁止しても、そのことによつて自然や虫に対して何の興味も持たないやうな子供達ばかりを育てたのでは、虫の減少ともたうずもつと大きな大きな原因である自然破壊を平気でやる大人に成長することにもなりかねないと思ひます。

自然開発という美名のもとに、年々山々の木々は倒され、山は削りとられてその現状は目を被いたくなるほどです。害は虫の数の減少した最大の原因がそこにこそあることは、誰でも知っています。虫の数が減少した原因として採集を責めるならば、当然そのもっとも大きな原因である無秩序な開発、無秩序な薬の散布、工場、自動車の排気による大気の大汚染等とそれ以上に責めなければなりません。そのことが、トンボやセミを自由に採り置かな自然の中に楽しく過ごしてきた今の私達大人がそんな害をみすう奪われた子供達に対してできる、せめてもの罪滅ぼしだと思っています。そしてそれは、将来採集しようにも虫が一匹もいないなんて悲しいことにならないための絶対に必要なことだと思っています。

置田の地方でも自然破壊の進行は例外ではないことを思うとき、この度の虫の会発足にあたって、このことともう一度みんなで考えてみる必要があると思います。さしあたって、自然保護と採集の関係を会としてはいかに考えていくのか、避けては通ることのできない大きな課題だと思うのです。

(きのした けんじ・国鉄職員)

お願い

編集局では、「但馬昆虫研究誌総目録」を企画しています。過去、但馬地方の昆虫相または生態研究、その他それに類するものについて発表された雑誌、記事等を御存知の方、お持ちの方は是非下記へ御連絡下さい。学会誌、学校生物部部誌、自刊のもの、どんなものでも結構です。郵便料金は当方が負担致します。お気軽に御連絡下さい。なお、「総目録」については並次この誌上にて発表していく予定です。

◎連絡先

063 松幌市

遠藤知二 (TEL. 011-711-)